日本医史学雑誌　第61巻第4号（2015）　447–448

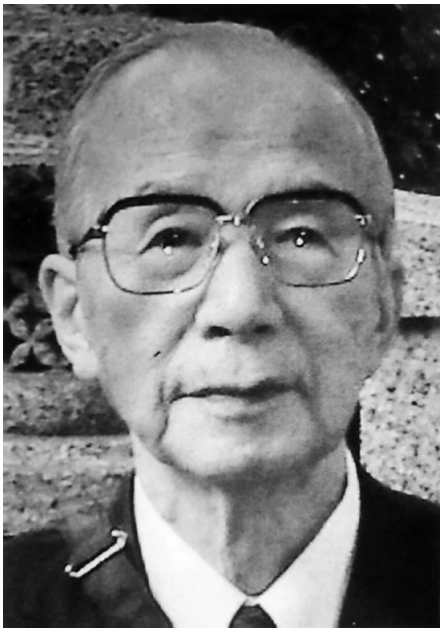
戸出一郎先生を偲んで

西巻　明彦

本学会の元理事，監事で，功労会員であった戸出一郎先生が平成26年12月18日に永眠された．先生に最初にお目にかかったのは，30年前の日本歯科医史学会の総会であり，この時，歴史をやるならば歯科だけではだめで，日本医史学会への入会をすすめられたが，怠惰な私が本会に入会したのはそれから4年後のことである．先生は終始温和な方であったが，実は大変意志の強く，同時にきびしい方であった．先生は，終始世田谷区内で，一開業医として過ごされたが，鶴見大学で教鞭をとり，経絡治療学会で鍼灸師を教導し，内経を中心に医史学研究を行うなど，さまざまな顔をお持ちであったことは，あまり知られていない．中でも亡くなる年まで鶴見大学で後進の教導にあたったことは，特筆に値する．チャイコフスキーが好きで，よく演奏会に出かけられていたことは，亡くなられてから初めて知った．

先生は，1923年9月11日，戸出軍兵の長男として生まれる．医師であった父親と13歳のときに死別している．岡山県第一岡山中学校を卒業後，1942年東京医学歯学専門学校（現，東京医科歯科大学）へ入学，1945年同校を卒業する．先生は「僕は頭が悪かったから歯科しか進めなかったんだ」と話されていたが，実際には，医師であった父親が早くに亡くなったため，周囲から医科ではなく歯科に行くよう勧められたようである．事実，亡くなるまで大きな病気をした経験はなかった．卒業時，空襲の中を逃げ回りながら，「人間とは何か」という命題を突き付けられたようで，それを契機として，当時の神保町の本屋にはキリスト教関連の本しかなく，むさぼるように読まれたとのことが1994年に日本基督教団に入信したことにつながる．

卒業後は岡山にもどり，病院勤務，岡山保健所勤務を経験している．この時，原爆治療で有名な鍼灸師，佐野義直氏に師事し，1960年再び東京に出た際に，佐野先生の紹介状を持って岡部素道先生に入門された．また，北里研究所東洋医学研究所に医史学研究室ができた時に客員研究員になられている．当時，北里では年代が同じであったためか大塚恭男先生と話をされる事が多かったようにお聞きした．少し前に戻るが，1953年に岡山大学医学部歯科学教室に専攻生として入室し，翌年岡山大学医学部第二生理学教室に転科し，1958年医学博士の学位を授与された．歯科開業医が医学博士を取るのは珍しい時代で，この時，本会の故中山沃先生に出会われたようである．



戸出一郎先生

先生がいつ頃から医史学に興味を持ったかははっきりしないが，『千金方』，『医心方』などの

中国，日本の歯科関係の古医書はほとんど研究されていた．先生の中心研究テーマは『素問』，『霊枢』で鍼灸の基本は両書であると生涯をかけて主張された．本会では第9回学術奨励賞を「医学館の考試」で受賞されている．先生の研究された後で私が『玉葉』，『明月記』の歯科項目を再度取り上げた時，やさしく「何か私が間違えた点はありますか」とおっしゃられた時は，背筋が伸びる思いであった．日本歯科医史学会が創立された時，終始日本医史学会との懸け橋となり尽力なされた．小生が第114回日本医史学会と第41回日本歯科医史学会の合同総会の大会長を務められたのも，先生の尽力のお蔭で下地ができていたためであった．

先生は2014年鶴見大学退職後，4月に門人の集まりの古典勉強会で咳き込まれていた．5月に肺に影が見つかり，6月には肺癌と診断されたが，凜として微動だにせず，告知を受けたという．積極的な治療を希望せず，最後は安らかに永眠された．また，御身体を学生教育のために使ってもらいたいという意思により，母校の東京医科歯科大学に献体された．亡くなってなお，教育のために貢献したいという先生らしい行動であった．御冥福をお祈り致します．